

# 理論社会学の一問題

社会学における存在分析と過程分析

領 家 穰

## § 1. はじめに

社会学が広い問題圏をもち、そのため、社会の概念そのものも、抽象の水準を異にするいくつかのものをもっている。蔵内教授は 1) 個人に対する意味での社会一般、2) 個別的な集合体としての社会、3) 包括的な生活の場であり、歴史の当体たる社会という三段での社会の取扱いをあげて、理論社会学の対象領域としておられるが、社会学の対象としてこの三つをあげるのが、一般的傾向となりつつある。

しかし、この三段の社会の概念内容となると、それぞれ社会学的な立場の相違によって異ってくる。一方では、これら三つの社会は全く概念平面を異にするという立場に立つものがあるのに対して、他方では、これら三つの社会は程度の差でしかないと考える立場のものがある。この両者の相違は、人間をその社会的実在の中においてのみ捉えうとする立場と、むしろ社会は実在としての個人の行為に依存するとする立場の相違として考えることが出来るであろう。もちろん、微妙な点に関しては、それぞれ多少のニュアンスの違いを含み、簡単に上記二つの群に分つことは極めて暴論と言わなくてはならないが、根本において異なる筈の二つの立場が、現在まであまり極端な対立をもつことなく、極めて平和に共存していることに社会学の現在の問題があると考えることによって、あえてこの暴論を立てることとした。というのは、この両者の極端な対立を避けてきたものは、一方では、方法論的自覚の不十分さ、他方では、それを支える人間観についての曖昧さが、与って力があつたと言うことが出来よう。

本論は、社会学の学問的性格を決定するについて、自然科学としての可能性を吟味し、その場合、どのような人間観が問題となるか、また、それが上記三段の社会の取扱いとどのような関係をもつものであるかといった問題について、素描的な提案を試みるものである。

## § 2. 自然科学における二つの方法 と社会学における二つの方法

経験科学の立場では、その現象型の研究ではなくて、その背後にある力学的元型の研究が必要であるという主張が行われている。レヴィンの集団力学の提唱がこのような立場を振りどころとしており、それ以後の社会心理学および社会学が、多かれ少なかれ、この影響のもとに形成されてきているが、これらの社会学が社会の巨視的部面の問題においては、いまだに現象型の分析の感のあることは否定できない。この難点はどのようにして克服することが出来るのであろうか。

一般的に科学という立場からではなくて、個々の科学の立場においては、現象型から元型の研究へという方向をとるとしても、広く自然科学そのものを見渡した場合、個々の科学の中には、一方ではより現象型からの接近に重点がおかれてきたものと、それに反してより元型的構造と運動に重点をおいてきたものとに分けることが出来る。一方に化学があり、一方に物理学があるという自然科学の状態がそれである。ところで、この二つの学問は、一方が存在のより定性的分析から出発したのに対して、他方は過程のより定量的分析から発している点が注目されなくてはなるまい。すなわち、存在という点では、まず固体の定性的分析を契機として漸次、気体状のものへの研究に進むこ

とによって、元型の研究が生れてきた。中世の錬金術との離別が元型の想定によって決定的となったのが、化学の場合ということが出来るであろう。これに対して、物理的な認識は遙かに夙く、またそれだけ進みえたのは、それが現象の多様性の中にしか本質が見出されないという物理学の対象の特異性によると言ってもよいであろう。これを社会学の研究の現状に比較すると、上にあげた三つの社会は、それぞれ二重の意味をもっている。まず、それは存在としてなほどうか集合体的なものとして扱われている。社会結合とか集団とか全体社会という場合、それらは社会の状態といひながら、それぞれ具体的な形態をもったものとして考えていることがその証拠である。それに対して、それが状態として考えられる限りでは、過程として、その力学的な緊張の關係が問われるとともに、場としての意味が前面に浮んでくる。この二重の規定を無意識のうちにとらせたところのものが、上記の二つの立場の妥協的關係であり、またこれを支える人間観ということが出来よう。これを裏返して言えば、社会学が、經驗科学として、完全に自然科学と同じ平面に立ちえなかつた理由は、この二重の交錯した規定の中にあつたといつてもよいであろう。このことは、社会的實在の存在的側面を重視する領域における元型の研究が殆ど発達していないこと、さらに社会的實在の単位と全体の水準の關係の不明確さといったことがこのことを示している。これに対して、上記の三段階の社会は、それぞれ力の作用する場としての意味を明らかにすることが怠られていたと言えよう。これらの三つの社会は、そこに作用する力を規定することによってはじめて、場としての意味が明らかにされる。それはまたこのような力の問題の背後にある人間観とも密接に關係してくる。すなわち、場としての社会の相違は、人間の生活の営みをどのような形で抽象して、力学的な運動の系を構成するかということにかかわってくる。

### § 3. 存在の分類と力学的構造の假定

まず、社会学における従来の存在に関する見解は、個人・集団・全体社会あるいは個人的結合

(關係)・集団・全体社会といった二つの群に大別できようと言つた。前者においては、行動 (Behavior) が最終の単位であつて、それが相關するときに社会が考えられている。社会と個人は行動を通して關係している。一層詳しく述べるならば、個人の行為の体系と集団の行為の体系——個々の行為の cross-sectional な体系——とは、個々の行為を通じて機能的に相關し、機能的な均衡に基いて社会は安定するものとする。したがつて、この点に関しては、存在するものは、社会体系の安定の程度に応じて存在すると考えているように思われる。しかし、この見解は現実には一見科学的性格を装ひながら、全くの逆の考え方を潜めて思われる。すなわち、何を安定したと見るかは、まったく個々の観察者に任されておき、その結果、機能的均衡という事実判断ではなくて、安定という價値的要素をまず決定して、その上に機能的均衡の考えが打ち出されているように思う。後者においては、社会的實在は、社会的結合、集合体、全体社会というそれぞれの次元において異つており、その意味で結合・集団・全体社会という独自の存在であり、それぞれ、その内的構造、単位としての意味を異にしている。結合は集団の単位であるが、結合が集団に昇華される仕方は、集団が全体社会に昇華される仕方と異つておると考えている。この両者の最も大きな相違は、個々の行為において社会を考えて行くか、それとも個々の人々の状態において結合を考え、結合において集団を考え、集団において全体社会を考えるとといった考え方をとるかということである。上に指摘した通り、價值判断が忍びこむことの問題は、後述するような観察者と対象の間の關係、すなわち、このような系の構成が自然的状態としてではなく、場としての時間的・空間的特性と相俟つて決定されることになる。

この領域の研究は、社会關係、すなわち、ギルウィッチ氏の結社の形式 (formes de sociabilite) におけるような内的關係の分析とともに、その現象型についての分析が必要である。すなわち、結社という場合、その結合性の特異性を、その力学的仮説との關係において想定すること、さらに詳細なる分類表とその解釈が具体的なプログラムと

して載って来なくてはならないであろう。この点に関しては、ギュルウィッチ氏の《我々》と《我汝関係》は、その結合の特性として完全に独立なものであると言えよう。すなわち、一方が融合においてその意味を見出すのに対して、他方がその両者の個性的関係において意味を見出すのである。結合の運動性が一方においては両者のもつ力——抽象化された意味においてであるが——の差の大きさが意味をもつような結合<sup>註1</sup>と、両者のもつ力の和の大きさが意味をもつような結合とは、それがさらに複合結合体にまで合成されて行くための重要な手懸りを与えてくれることとなる。この二つの結合性の明細表の作成が集団の分類への途を用意することになると考えられる。

註1 この言い方は誤解を招くと思われる。和の手続きによって、その質を失うことによって全く別個の運動可能性が生れることを意味する。

結合ならびに複合結合体としての所謂集団の分析は、それが具体性をもつにつれて、その力学的な場の性質が異ってくることとなる。この点に関しては稿を改めて論ずることにしたい。

#### § 4. 過程分析の諸次元と抽象性の問題

われわれは上において、具体的存在の分析に関する方向について、示唆し、一・二の提案を行った。ところで、社会を社会的力の作用の場と考えた場合、この力の関係を過程という面において普通捉えてきた。しかし、それはすでに指摘したとおり、一面では存在の現象型的分析を含んでおり、したがって、力の概念が前面に現われることなく、それ故、混乱した二重の規定となったのである。

われわれは、力の概念をまず人間観の側面から分析して、その抽象度と併せて力の概念を確立し、これによって場としての社会の特性を明らかにしたいと考える。

##### 人間観と力の性質の問題

われわれは自己の行為とその結果に関して、二つの考え方をもっている。一つは自己の実現しようとする目的に対して、起りうべき事態を洞察し、その中から目的となる状態に到達しうる方法

を選択し、追求し、それを自力で達成したという喜びをもち、あるいは達成し得なかった場合に悲しみを感ずるという立場である。ここでは自己の下した選択と決定と努力をすべて自分自身に属するものとして考える立場である。これに対して、すべての決定は、必然の結果として考えられるという考え方がある。すなわち、個にとつての選択は、全体の中では完全に偶然のものとして決定されるのであるという考え方である。換言すれば、ある機能は社会的に不可欠なものとして要求されるが、その機能を満たす個体として誰を選ぶかは、全く偶然的な機制に基づくという考え方である。その意味で個人が自己についてもっている像がどれほど異っているように見え、差異を強調することで、自己の努力を評価するとしても、出てきた結果は必然的な結果でしかないとする考え方がこれである。

この二つの考え方は、人間の可能性についての評価の仕方を表わすと共に、力に関する二つの立場を示している。ここでは二つのことが問題とされている。(1)動機と結果の何れに重きを置くか、(2)結果の評価は何を基準として行うかということである。前者は動機を重く見、したがって結果の評価も、自己の期待に照らして行う。この究極のところには、すべての評価は、限界としての個体の生命の範囲が問題となっている。時間・空間的な生命の範囲は、生命の延長としての技術その他のものを媒介として変化するが、基本的には寿命に規定されている。後者は結果そのものを重視し、個体の生命を超える時間・空間に対応する考え方である。この二つは人間の評価に関して、一方が人間を高く評価するのに対し、他方はあまり高く評価しないという点に特色がある。この点に関しては、ウィーナーの指摘通り、短期的には人間の意図とか努力が意味をもつとしても、十分長い期間のうちには、このような意図や努力の結果に関する知識が普及する結果、特定の一人の人にそのような結果が帰属させられるということはいえよう。すなわち、人間は考えている程、愚かでも賢くもないということになる。このことから二つのことが言われる。一定の社会をとってみて、その社会の秩序量が増加するという過程

は、一定の時間内の問題であり、十分長期をとってみれば、この逆の過程が問題となる。過程分析に関して、この二つのものは、全く対蹠的であり、力に対する考えも異っている。長い間に誰もがかなり一様な知性と行動のレベルに達することによって、このような知識と行動の偏在と秩序化が防がれるという風には、具体的にはなかなか考えられなかった。その理由は一様な知性と行動のレベルに到達するためには、それが個体の生命維持の期間よりも長い期間を要したからである。しかし、いまやこの事情は一変しつつある。生活空間は一方においては、技術の発達によって、空間の征服として現われ、このことは同時に、単位時間当りの生活密度の増大となって現われてきている。その結果、知性と行動のレベルの斉一化の可能性は、大なる社会ほど大きいものとなってきた。少くとも個人の一生よりも短い期間に、意図とは別個な可能性の現われることが可能となってきた。換言すれば、質点に相当するものとして人間を考えることが妥当な場が現われてきた。このような場は、時間的・空間的に限定されていない。最も抽象的な意味で人間が取扱われ、その運動に関しては、最小努力の原理——最適化という方が妥当かも知れないが——が妥当するものと考えられる。これまで全体社会論で扱われてきた部分の問題は、主としてここに属する。ただし、この点に関しては、運動量保存法則の成立する系の成立が前提となっている。しかし、運動量は増加して行く系を考える方が妥当であり、したがって、世界が人々の視野の中に入ってくる限りにおいて一定の必然的傾向がみられる。個々の人間の生長の問題を含んで、社会の拡大は、運動量保存法則をむしろ過去のものとする傾向がある。最小努力の原理もこの観点からは、単純力学系構成の原理とならぬ。力学系の構成は運動量保存法則の仮定の上に成立する。この問題は個人に対して相対的に抽象的な意味をもつ集合体の場において成立する。巨視的過程は、運動量保存法則が成立しない場であり、そこでは必然的に一定の運動量減少の原則によって、社会の拡大と、相対的な内部の力の低下という問題が現われてくる。それと同時に上述のような相対的な知性と行動のレベルの

漸近的低下が促進される。全体社会が歴史的にその内容を変化してきたことはこのことを指すと考えられる。

巨視的過程分析の前提について述べたが、このような過程は、力の存在形態として述べた部分的集合体の内部におけるより低次な力の性質とその場合における条件の問題を提示する。巨視的な場においては、人間の可能性は、最小努力の原理にもかかわらず、相対的な力の低下の法則が現れる。しかし、最小努力の原理は集合体中の最大なものにおいて意味をもつに至る。集合体はさまざまな水準において考えられるが、いずれも力の存在形態として考えられていることによって意味をもっている。ところで集合体そのものの運動という問題に対して、その内部におけるさまざまな力の存在形態と運動量が問題となる。ここでは、力の存在が具体的な人間または結合に関係づけられて、相対的な重みをつけられて分布している。このような関係は、集合体がある程度運動量保存の系として考えられることにある。この場合、集合体のもつ力は、その内部におけるさまざまな力の存在形態と密接に関係する。この場合、その集合体の機能は、社会的にどのような部類の価値と主として関係するかによって考えられることとなる。ここでは人間は最大集合体の中よりも具体的なものとして考えられる。時間・空間の両面に関して一層制約されており、その限りで、相対的な性格を帯びてくる。最大の集合体は、巨視的な場としての意味をもつ。それは相対的に絶対化されて現われる。ここでも表面化しない力が考えられる。集合体は少くとも力の偏向の場として、その集合体としての運動の方向に対して、同方向をとるものに関しては、正の方向に、その反対の運動に関しては、負の方向に作用するような場を形成する。この運動の方向は、その内部における価値選択、運動への転移に関する力関係の一方への転化を意味し、それは、上述の諸力の存在形態の関係として現われる。

最後に、絶対的に相対化された世界、すなわち、ほぼ相等しい規模の場合における相互作用の問題である。この場合、行為者は同時に観察者である。観察者は観察によって、相手に影響を及ぼ

し、同時に相手の影響を受ける。ここでは相手に関する情報は、変動してやまない。その意味ではこれらの情報は確率的であり、統計的なものである。微視的な場における情報は、常に保存系に属するものではなくて、増大の傾向である。この場合、集合体内の分布が、このような微視的な場における相互作用を規定する。情報論的にはゲームとしての性質を有する。力としては、それが存在のいかなる水準に属するかによって、相対的な関係が決定される。

## § 5. 観察と存在と場

以上の分析は、観察者とその対象としての社会の関係を暗黙のうちに前提としている。社会を意味的内実として捉えるという立場と、社会を対象化し、客観的なものとする立場が区別されるが、観察者と存在としての社会の種類、ならびに力の性質によって異なるところの場の種類によって異ってくる。

社会学における法則は、一方では、三つの場における法則性を意味する。相対的に絶対化され、その限りでは運動量保存法則の成立する、力学系として構成可能な場における力の諸関係の間に見られる法則性の認識がまず考えられる。最小努力の原理は、この系の構成の重要な根拠となる。これに対して、極めて長期——永遠の相の下に見たとき——の、完全なる静止への必然的な運動という最も巨視的な法則性、すなわち結果の継起における必然的傾向が第2の法則である。これに対して、比較的閉された関係における知性と行動のレベルの一定化の傾向と、その大社会への反響、それを規定する個と個、結合体と個、結合体と結合体の関係における確率的決定性の法則が第3の法則である。

これら三つのものは、まず観察者と観察系の構成の可能性によって決定される。第1はわれわれは、いかにして巨視的社会を観察しうるかということである。個人としての観察者が極めて莫大な社会を客観視しうるのは、自他の区別を超越して、そこにおける可能性を見渡すことの出来ることによる。ということは、さまざまな個人的な欲

求にもとづく一切の行動の可能性を思弁することによって始めて可能となる。

これに対して、最大集合体に対する関係においては、それがすべての欲求を蔽いうるとする程度において、同様の意味で運動の可能性が観察される。静止系としてこの観察系が構成されうるのは、その内部における運動の可能性を否定するところにある。すなわち、あらゆる運動可能性に対する均等なる配慮がこの場合における観察の根拠となる。

観察者を個人として扱ってきたが、このことは組織体においても同様である。組織体は運動における規模の相違であり、したがって、対象との相互作用の可能性における相違という点で問題となるに過ぎない。この場合の静止系構成の可能性は、その相互作用の可能性と密接に関係する。

## § 6. 力学的分析と単位

人間社会が人間の行動可能性によって規定される抽象空間であり、その中に本質的に水準を異にする三つの場が区別された。その場合、時間と空間が重要な関係を有していた。このうち、第一の場は、歴史の場として問題とされた場である。この場における必然的傾向は、それが一つの可能性に向って無限に接近してゆくということである。このような可能性は現在のところ、地球という空間的限界に規定され、しかも単位時間当りの空間征服の増大ということによって、相対的に時間と空間の拡大の方向が与えられつつあり、その意味で、その内部における相対的知識と行動の斉一化の傾向は蔽うべくもない。その間に部分的秩序化の方向が認められるにしても、所詮、この傾向は否定出来ない。このような歴史の場に対して、研究の必要上と、その心理的な理由の両面から、上述したように、運動量の相対的に保存された場を考えることができる。さらに、以上の二つのものに対して、心理的な理由から、完全に相対化され、その意味で、非封鎖的な系が考えられる。これが情報量増加、したがって、運動増加の系である。このような三つの場に作用する力は、それぞれ性質の異ったものとして考えられる。ただし、

それらの力と社会的存在は、直接的には関係しない。社会的存在の次元の区別は社会的場と社会的力に直接的には関係しているとは言えない。まずその理由は、場の設定が何よりも、便宜的なものであって、絶対的なものではないという点にある。

歴史の場が最も包括的な場であって、これのみが絶対的に客観的な測度をもっていると言える。この場においては、一定の条件——人々の努力をも含んで——のフィード・バックを含んで、全体的には、時間は一定方向に流れるが、各時点における最大にして包括的社会（集合体）に対応する、回帰の時間は一定の法則に従って変化するものと考えられる。

これに対して、運動量保存系とは、特定の時点と、個人の一生を単位とする時間的区間に対して、相対的に絶対化された場である。この場合には、第1の場における時間的単位を個人の一生の期間を単位として、一定時点に固定した場合と言うことができる。

第3の情報量増加の系は、心理的な一生を絶対化することによって、はじめて可能となる系である。

したがって、第1の場だけが実在的な場であって、第2・第3の場は、その特殊な場合に属すると言える。第2・第3の場において問題となるのは、社会的存在の水準に関する矛盾の存在様式である。社会的存在が一方で巨視的社会から微視的社会（最大の包括的社会から集合体そして結合）という抽象的形式の次元をもっているとともに、結合の最も原初的なものは自然的基礎に基くものから、心理的基礎に基くもの、精神的基礎によっ

て埋め尽されるものまで、三つの層に亘っている。

したがって、これら三つの層における結合は、自然的結合の可能性と、自然的結合相互の間の矛盾的關係と、その解決のために、相対的時間の範囲内において、安定性をもった複合結合体——必ずしも自然的なものではない、——が、これら分析の単位として考えられる。これらの結合と複合結合体の安定の諸条件が力学的分析の前提となる。

上記の社会的場に対応して、このような単位の設定と、それに伴う安定条件が問題となる。この問題は、社会的時間と社会的空間と社会的力の分析の問題である。それはまた経験的社会の分析の問題であって、具体的には結合から複結合体に至る要素的社会の周期表が関係する。この点については稿を新にしたい。

#### 参 考 文 献

- N. Wiener: Cybernetics, 2nd. ed. 1962  
 蔵内 敦太; 社会学  
 G. K. Zipf: Some determinants of the Circulation of information, (Amer. J. Psychol.  
 H. A. Simon: Models of Man.  
 G. A. Miller: Language and Communication 1951  
 G. Gurvitch: La vocatison actuelle de la sociologie  
 岩波 講座; 「現代物理学」  
 水島三一郎; 分子  
 H. D. Lasswell, "The Political Science: An Inquiry into the possible Reconciliation of Mastery and Freedom," American Political Science Review, Vol. L, 1956  
 F. Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft 1887, 8. Aufl. 1935